

東方氷精伝

如月 達也

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

恐らくエタる。

…チルノ。『東方Project』という弹幕シューティングゲームの登場人物の一人であり、自分のことを『最強』だと思っているが、実力は妖精の中では強い止まり。が、チルノ固有の能力である『冷気を操る程度の能力』。これの使い方次第では最強もあり得る——気がしないでもない。この小説はその『チルノ』に憑依してしまったとある男のお話。

第一話

目次

1

第一話

…『東方 Project』というゲームを知っているだろうか。様々な妖怪、妖精等—— 勿論人間も—— の少女達が弾幕ごっこという遊びを通して異変を起こしたり、それを解決したりする弾幕シューティングゲームだ。そのゲームのキャラの中でも僕が好きなのはチルノ。冷気を操る程度の能力を持っていて… ってそんなことはどうでもいい。なぜいきなりこんな説明染みたことを言っているかというと、だ。

「どっかの…(ハハ)…」

現在僕がいるところは全くもって見覚えの無い湖。周囲には霧が漂っていて視界が少し悪く感じる。近くに人の気配はせず、ただ霧が見えるだけである。

「わけがわかんない…」

現状の理解ができず頭を抱えようとして、はて、と首をひねる。自分の声はこんなに高かったであろうか。それと殆ど同時に、え、と呟く。—— 視点が低い。普段ならば今自分が立っている位置からなら湖の表面位は見えるはずである。

——ふと、何か近づいてくる気配がした。今誰かと遭うのはまずい。そう判断し、何か近づいてくる方向とは反対に向かつて走り出す。飛ぶことはしない。：いや、しないというより出来ないのだ。肉体はチルノだといっても中身は一般人。そこらの妖精や妖怪の様に楽々と空を飛べるわけがない。後ろから誰かの声が聞こえるが無視して走る。

しばらく走ると前に先程見ていた紅魔館の門が見えてきた。どうやら逃げた方向が運良く紅魔館の位置する方だったのであろう。とにかくとりあえずここの中に逃げ込もうと門を通ったところでおや、と疑問が浮かぶ。

東方紅魔郷では、舞台である紅魔館の門番として紅美鈴という妖怪が存在する。するはず…なのだが。

周りを見渡す限り人影は見えない。が、今はそんなことを考えている暇も無いので浮かんだ疑問についての思考を止め、急いで紅魔館内部へ入り込む。

——中に入って目に入るのは紅、紅、紅。とにかく紅い物が多く、床なんかは血で塗ったかの様な濃い紅が続いている。初めて見る本物の紅魔館に興味湧いてくるが、今はそれどころではない。なにせ自分は不法侵入者。門番がいなくても不法侵入は不法侵入。見つかったら面倒くさいことになるのは想像に難くない。ということどこかに隠れてしばらくしたら脱出、が現状とるべき行動だろう。まずは誰にも気づかれないよ

うに隠れる場所を――

「あなた、侵入者ね？」

――探すことは無理そうだ。

後ろからの殺気を受け、体が蛇ににらまれた様に固まる。ああ、神様。私を助けてください……などと普段全く祈っていない神に祈りを捧げていると、背中に受ける殺気が強まる。

「不審な行動はしないでちょうだい。両手をあげてゆっくりこちらを向きなさい。抵抗の素振りを見せた瞬間、あなたの頭は体と一生のお別れをすることになるわ」

……まずい。祈るポーズが癩にさわったようだ。相手に警戒されないようにゆっくりと、声の主の方へ振り向く。

そこにいたのは銀色に輝く髪を持ち、メイド服を着ている少女――この紅魔館のメイドであり、『完全で瀟洒な従者』の二つ名を持つ――名を十六夜咲夜。東方紅魔郷の5ボスがこちらを睨みながらナイフを構えていた。